教えて 猪川先生！

第3回

知っておくときっと役立つ 薬の話

居宅で薬が正しく保存されていなければ、薬の品質劣化で治療が有効でなくなるかもしれません。正しく管理されていなければ、誤薬の危険もあります。廃棄処理や残薬対応も大事です。薬の取り扱い方に関する知識と意識を高めていきましょう。

今回のお題

薬の取り扱い方を知る

家庭での薬の保管、どうしてますか？
期限切れの薬、どうしてますか？

執筆 ▶ 猪川和朗

広島大学大学院臨床薬物治療学・准教授。徳島大学薬学部を卒業した後、薬剤師として大分大学病院薬剤部に勤務。医薬品医療機器総合機構などを経て、広島大学へ異動し、介護支援専門員を取得、介護職員初任者研修を修了。博士（薬学）、衛生検査技師。

薬は「温度」「湿度」「日光」などの影響を受けると、分解したり変性したりします。薬の品質が損なわれると十分な効果を発揮できなくなるばかりか、変化物が体に有害作用を及ぼしかねません。「温度」「湿度」「日光」などから薬を守っても、それぞれの処方薬（受診科ごと、薬局ごと、日付ごと）で整理しておかないと、間違えて服薬する危険があります。また、飲食物と区別しておかないと、処方された本人やご家族が誤飲・誤食しかねません。知っておくときっと役立つ、薬の保存・管理・廃棄のポイントをお伝えします。

キホンは室内保存 傷みやすい薬だけ冷蔵で

薬は「高温」「多湿」「日光」が大の苦手です。家庭内で薬を保管するときはこれらを避けるのが最重要です。つまり、湿気と日光を避けておけば、室内（室温15～25℃）の保存で問題ないということです。

温度の面では低温の方がよりよい保存環境になるのですが、冷蔵庫内に保存すると出し入れの際の温度差で結露が生じ薬が吸湿してしまうため、逆によくありません。これらの理由から、大半の薬にあたる内用剤および外用剤は、室内室温で保存します（**表1**）。避けるべき場所は、日の当たる窓際の棚、湿度の高い風呂場・洗面所の近く、空気が対流せず高温多湿になりかねない押し入れ・タンスの奥などです。特に包装された内用剤は湿気に弱いので、ふたの閉まる缶やプラスチック容器（密閉容器）に乾燥剤を入れて、密閉保存することが大切です。食べ物やお菓子の容器の再利用は、間違える元になります。市販の容器を新たに購入し、薬専用にするのが無難な方法です。

これに対し、一部の薬に限っては冷所保存する必要があります（1～

介護従事者の目

有効・安全な治療に重要となる薬の保存や管理状況について、居宅モニタリングで確認してみましょう。ひとり暮らしなら整理整頓が苦手な高齢者も多いですし、同居なら家族に薬の困りごとや悩みごともあるかもしれません。すぐ簡単に対応できそうと思ったら提案し、利用者さんや家族の生活環境下で一緒に改善してみる。複雑で難しそうと感じたら、薬局・薬剤師に聞いてみれば、コミュニケーションと連携のきっかけにもなります。その後、改善の取り組みがうまく機能しているか、さりげないチェックもお忘れなく。